

ぶどうの木

第 9 号

目

次

巻 頭 言	榎 本 牧 師	1
夏 期 学 校	北 川 理 絵	2
見えない方に生かされて	大 口 種 義	3
訓 練 と 教 訓	下 松 由 美 子	5
1 枚の説教プリント	正 野 員 子	8
みことばと感謝	伊 規 須 太 郎	11
文 芸 コ ー ナ ー	正 野 ・ 松 山	18
続ヒヨコのオ 1 歩	安 東 倫 子	20
旅 か ら	安 部 タマエ	23
旧会堂とその周辺	伊 規 須 太 郎 ・ 泰 子	28
花 意 竹 情	小 羊 生	34
思 い 出 と 雑 草	老 女	37
籠を出た小鳥	上 野 米 子	39
編 集 後 記	安 東 篤 良	42

大 濠 公 園 教 会
八 幡 前 田 教 会

巻頭言

榎本利三郎

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。
もし人がわたしに つながつており、またわたしがその人とつながつておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

(ヨハネ 十五ノ五)

「ぶどうの木」第一号が出て今年は九年を迎えます。主は「わたしはぶどうの木、わたしの父は農夫である」と仰せになります。父なる農夫のめぐみと憐みにより此の「ぶどうの木」も9号を迎える事が出来ました。九月二十九日に校正された原紙を編集の安東兄から受取りました。「あとは巻頭言だけです。」と言われて、自分が書けば直ぐ出来るなと考えました。毎日会堂建築工事も進んで居り、気持ちも何となく落ち着かないまゝ、「少し落ち着いて書き度い。」と思つて居るうちに日が経つてしまいました。巻頭言は書けばいつでも書けると考えて居ましたが、少しも書けません。夫れで居つて「自分で書く」と思つて居るために、切に祈

る事もしないで「書かないと日が経つてしまふ。」と心のうちに焦るばかりでした。そんな時巻頭言の聖言を与えられました。「あなたがたは何一つできないからである。」と泌々と教えられ、主の聖前に悔い改めて、「私の能力や努力ではとても出来ない。一行書くのも主のめぐみによらなければ書けない。」と主に祈り、やつと今日ペンを執る事が出来ました。

今旧会堂の姿は消えました。主は此の廿七年の間、旧会堂を用いて私共を恵み給いました、未だ記憶の新しいうちに「旧会堂と私」について記録して置き度いと思ひます。「ぶどうの木10号」は何んでも結構ですが、どなたも書く材料が豊富にある「会堂と私」についてどなたもお書き下さるようお願いいたします。

夏期学校

北川 理 繪

わたしは、夏期学校で行橋の青年の家へ行きました。

最初の夜、親ぼく会がありました。親ぼく会つて、どんな事をするのかなと思ひながら、わたしは、こうどりのいすにすわつて待ちました。高木先生が、くじのはこを持つて来られて「この中から紙を取つて下さい。そして書いてある文字を見て下さい。」と、言われました。

わたしが取つた紙にはAと書いていました。

「じやあAの人はここに集まつて下さい。」と、おにいさんたちが言われました。

わたしがAの場所ですわつていたら先生たちが人形げきをしてくださいました。人形は大根やさつまいもを使つてじようずに作つていました。物語は、ある友だちにさそわれて、おとうさんが止めるのもきかずに自分がもらひ、さいさんをぜんぶもつて町へ出かけたが、さいさんをつかいはたして苦しい生活に落ちて家へもどると、おとうさんがやさしく、むかえてくれた

と語りお話をした。

神様をおとうさんにたとえたお話ですが、わたしにも神様のやさしい愛がわかるような気持ちがありました。

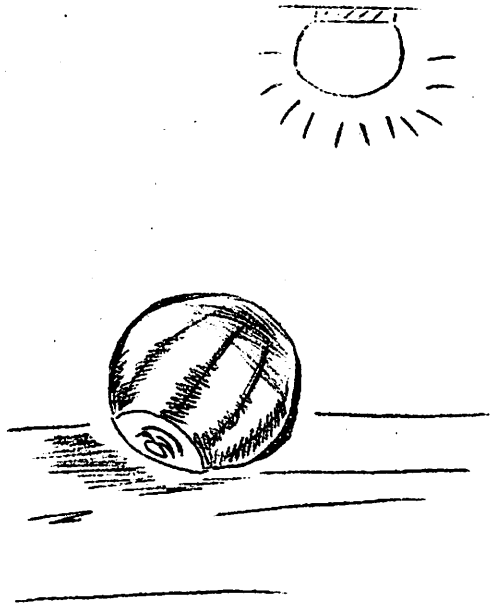
人形げきがすんで、むかできようそりをしました。二種類ありました。ひとつは、けんけんて手をつなぎ走ります。わたしたちが一等でした。それからもうひとつは、こしをかがめて前の人の手を右手で持ち、左手はまたをくぐつて後ろの人と手をつなぐのです。これもやはりわたしたちが一等でした。

でも、とてもむずかしかったです。急いで走れば手が切れるし、ゆつくり行けば、つまづきます。ほんとりにおもしろかつたです。それから、ふうせんわりゲームをしました。ふうせんを足にまいて、ほかの人のふうせんをわり、自分のふうせんをわらないようにするので、最後までふうせんが、われなかつた人が勝ちです。しかし、なかなか勝負がつかなかつたので、残つたふうせんはその人がもらいました。わたしは、とうとうわつてしまいました。おもしろくて、おもしろくて、なかなかわらいが止まりませんでした。

「では、これで親ぼく会を終わります。」と安東先生

がおつしやつた時、とても残念に思いました。あんなに楽しかつた親ぼく会が終る事が、とても残念でした。

終



「見えない方」に生かされている(1)

大口種義

私が失明したのは二十五才の誕生日でした。

伐採夫として働いていたこの日の昼前、自分の切り倒した木を定つた長さに測つて、中腰で鋸引をしていました。目が見えたのはその時まででした。

同僚の切つた木が、見当違いの方に倒れてきて、私の頭に当つたのです。

意識を失つて、倒れているのを、木を切つた同僚と丁度これらの木を馬車で運ぶのに来合せた従兄弟が、さいわい近くにあつた一軒家からリヤカーを借りて、三キロほど離れた山向この病院へかつぎこんだのですが、頭を強く打つているので「三日命があるかどうか分らない。もし命があつても白痴になるか、半身不随になるでしより。」と言われたそうです。

意識不明のまま眠り続けて四日目の深夜、復員したばかりの弟が、八幡から介抱にかけつけて付添つていましたが。退屈しのぎにミカンの罐詰を開けて自分で食べながら、その一粒を私の口に入れると、モグモグ

していたがゴクリと吞込んだ。という、それを見て「あつ、食べた食べた」と。それで大急ぎで七輪に炭火を起し御飯を炊いて食べさせたそうです。

また、母が食事をさせる時、煮魚の身をほぐして、骨を良く取り出し出したと思つて、口に入れてやるというまでも吞込まないので、取り出してみると、ほんの細い骨が一つあつたそうです。

意識が無いまま、このようにして四〇日ほど経つた。五月の初め頃から、自然に、次第に急速に意識が回復してきました。

まだ失明のショックは感じない七月に、眼科の暗室で検査をしてもらつたことをぼんやりと、しかしはつきりと覚えております。

意識不明の四〇日間が、二〇数年経つた現在であつたらと思つとゾーンとすることがあります。それは、今でしたら車で総合病院へ運ばれ、さんさん研究材料に使われたうえ、心臓を、眼球を抜き出されたかも知れません。今は知らない人ばかりの中にあつても、目に見えない方が、「母の胎内にある時から、私を聖別し、み恵みをもつてわたしをお召しになつた」(ガラ

テヤ一・一五)のです。

神様を全々知らなかつた時から、一方的な御恵みによつて守り、この救にあずからせていただいたのでした。そして視力は回復しませんが、神様の存在を知らされ、この一切の見えない方によつて支配され導かれていることを確信せられました。

(1)終



「訓練と教訓」

下松 由美子

私は現在、済生会八幡病院の第三病棟に、勤務しています。済生会の火災についてはテレビ、ラジオ、新聞を通じて御存知だと思えます。死者十三名をだしたこの火災は、戦後、病院火災では最大といわれています。

私はこの夜、勤務しており、残念なことに私達の病棟より死者十三名を出した訳です。

私は看護婦として、各方面から非難を受けました。あれからも、早半年が立ちましたが今だにあの時の状況や、亡くなった患者さんの一人一人の顔を思い出します。人は運が悪かつたと言ひ、なぐさめますが、私は……

「わたしの子よ、

主の訓練を軽んじてはならない。

主に責められる時、弱り果ててはならない

主は愛する者を訓練し、受け入れる

すべての子をむち打たれるのである。」

と、聖書にしろるされているように、私は今まで、何の悩みもなく平凡に過ごして来ましたし、信仰においても、家族がクリスチャンだからということでも自然に信仰生活に入つた形でした。ですから、神様がこころで私を、訓練しなければと思ひ、今度の火災の中に、あえて私を立たせて下さつたのだと思つています。

今頃になつて、このことをみなさんにお証するのは、遅いと思われませんが、私は最近、あの火災と同じ様なことを、経験したのです。それが私に証しすることを、決心させたのです。それは九月一日、私の夜勤第一日目の事でした。

私は、準夜勤務の人から、申し送りを受け、みんなが帰つた後、詰所の整理をしている時でした。外から救急車の音が聞こえ、私達の病院の前でその音は止まりました。

「あつ救急車が止まつたわ、入院するのかしら当直の先生大変ね」などと、相勤務者と話しておりました。それから数時間後、もう時計は〇時三十分を過ぎていました。

当直婦長が、病棟にかけつけてきました。

そして、「貴方達、前出さんの事を知っていますか。」と尋ねられました。前出さんは、私の専攻科の後輩で、今年学校を卒業し済生会に就職しました。そして私と同じ病棟に勤めており、先き程、準夜勤務をして帰つたのです。

私は、「何のことですか。」というのと、「ああ、知らないのね、実は、彼女は準夜の帰り弟さんの車に乗り、交通事故にあつて今、意識不明なのです。それで今から手術をします。」と言うと、急いで去つて行きました。

私達二人驚いて、ただハラハラとするだけでしたが、手術が無事に終つて助かつて欲しいという気持ちで、いつばいでした。

しかし、私と相勤務者の脳裏には、もし助かつたとしても、ただ生きていくだけで意識がなく、生と死の間をさまよつていくような人間になるだろう。とお互いに感じました。それは、現在私達の病棟に、この様に、俗に植物人間といわれる人が入院していたからです。私は神様にどうお祈りしてよいのかわからず、「あなたの御心のままにして下さい」とつぶやきました。

午前三時過ぎ、当直の婦長の知らせてかけつけた病院総婦長より電話がありました。

「前出さんはもうだめでしょう」と、

私は体がガクガクとして、急いで病棟看護婦一人一人に電話をかけました。みんな数十分で、かけつけてきました。その時はすでに、前出さんは亡くなつていました。そして彼女の死后処置は、病棟看護婦と数人の友達によつて行なわれました。私もお手伝いをしたかつたのですが、勤務上、持ち場を離れることを許されず、いらいらとしていた時に、私達の病棟婦長が来て、私達の気持ちを察してか「あなたたち、前出さんの所に行つて来なさい。私がここにいてあげるから」という言葉に甘えて、私達は急いで、手術室に行きました。手術台の上に乗せられ、冷たくなつていく彼女、美しくお化粧をしているけれど、どこか寝しげな顔をしている。帰る時「下松さん今夜は重症がいるから忙がしいですよ、頑張つて下さいね。」と、笑つて帰つたその顔も今は別人のようです。やせていた顔は打つたのだろうか、少し腫れている。体の所々には内出血をしている。私は余りの出来事に信じることができず、涙

の一滴も出なかつた。病棟に帰り、早出の人に申し送る準備をしなくてはと思いつつも体の力が抜けていて、全身に熱感を覚える。ため息をつきながらも仕事をしていた。丁度、患者の脈拍を計っている時だつた。

“ズシン”という音と同時に建物がグラグラとした。私は驚いて詰所に戻るとびつくりして飛び起きた患者が詰所近くで騒いでいる。私はこれを見て「あつ」と思つた。それは半年前の火災の時、火災報知機で起きなかつた患者が放送の声に驚き、詰所にかけて来た時と同じ光景である。彼女の死というショックと、この地震のショックが、私の身も心も、鋭く打ちのめしたようだつた。それから翌日、友の死と地震のことで、病院はどつた返してあつた。その中で私は、「又下松さんが夜勤の時に起つたね」という声を耳にした。私が二日目の深夜でした。準夜勤務者の一人が「私下松さんと夜勤するのが恐い。何かが起こるから」といい、もう一人は「あなた、おはらいをしてもらつたら」という、何も私の身の上にかかる訳でもなし、ばかばかしいと思ひました。

私は今度の事を通して、私に神様が何かを教えている

のではないだろうかと思ひました。

火災の時、私は訓練されたのだと思ひ、そして今度のことを通して、私達人間はいつ、どこで、どんなふうにして死ぬのか、わからない。つまり死というのは、どこにでもあるし、いつおそつてくるのかもわからないと思つと、人間、一日平凡に、そして無事に過ごすということがいかにむずかしいかということ悟つたのです。私達、夜眠ると朝がやってくるのは当然だし、朝が来ると夜になるのは、これ常識というように、一日を迎えることは、当り前のようにして、過ごして来ました。ですからこんな考えをもっている私に、神様はこのことを知らせ、無事に過ごすには神様に頼らなければならぬということを私に教えるためだつのだなあと思ひました。今では朝晩お祈りをしています。

(自満ではないが、今までしてはなかつた)

朝、起きて空を見ると、「あつ私は生きている。夜中に火事も地震もなかつたのね。」と朝を迎えた喜びと一日無事に過ごせる様にお祈りをします。勤務中もします。そして夜、床について一日無事に過ごせたとを感識し、夜中、何ごともなく休め、朝を迎えられ

るように祈つています。そして亡くなつた前出さんには感謝と共に彼女が神様の御元に行くようお祈りしています。

しかし、大きな犠牲を払つてまで色々なことをなさる神様が恐しくてたまらなく、またこれほどに、私を愛して下さる神様に感謝せずにはいられません。今度のことは、私にとつては大きな教訓でした。

前出さんが亡くなつて四日目、病院の副院長がある神社より「おはらいのお菓子」を買つて来ました。

「三病棟によく死者がでるから、みなさん、食べておきなさい」ということで、看護婦に渡しました。

もらつた看護婦は、是非下松さんに食べさせなくてはと、私の為に少し残していました。

私はそれを食べて「これは何と甘いお菓子だろう。これだけに何カロリーあるのかな、肥えるかな」と意味なく食べてしまいました。

終



一枚の説教プリント

正野員子

もう二十年にもなりましようか、私が東郷に居りました頃、八幡前田教会から出たガリバン刷りのプリントが、どのような経路で私の手に入ったか知りませんが、その一枚が私の運命をがらりと変えてしまいました。

私がいつも礼拝していた○○教会は、神学校を出たばかりの牧師で信仰経験が浅い為でしょう。悩みのうちいたので解決はないものかとご相談に行くと、私にそんなことを言つても困るとおつしやつたので、何の為の信仰か、わからなくなつてしまいました。

それに毎週の説教は人の借り物で造りあげた作文に過ぎず、それを禱読みするだけのもので、私等のほろを見て説教することはありませんでしたので何の救いも希望も受けることは出来ませんでした。ある優秀な大学生が、人は何の為に生きるかと、その真理を牧師に教えを乞うたのでしたが得られず失望落胆して遂に惜しくも若い命を自ら断つてしまいました。

又その父親は牧師を見限つて脱退するという悲劇も起りました。私も生きるギリギリの線まで来ていたので、手にした一枚のプリントが、どんなに大きな救いとなつたかわかりません。ザラ紙のガリパンの字も、うすれてしまふ程、引出しから出しては読み、出しては又読みました。破れてしまふ程、何度も読み返したものでした。

「神、天地とすべてのものを造り給えり。無から有を造り出す力をもつて、どんな境遇の者をも救うことが出来る。」ということがキリストを通して、ねんごろに書いてありました。活字ではありませんが脈々と生きづきを感じ、私の知らない世界があるようで、ほのかに希望が与えられたのでした。新約聖書だけでしたので創世記など読んだことのない私は新発見をしたように思われました。私は一度でよいから、前田教会で直接、この耳で聞いてみたいと、いつも思うようになりました。

その頃、行商で糊口をしのんでおりましたので、いくら行きたくても、できないことでした。私は自転車に大きな荷を積んで、八幡に向つて、東へ、東へと走

り出します。だんだん帰る道程は遠くなるばかりで骨折りも大変でした。「お前は、お馬鹿さんだね、毎日東にばかり走つて、その半分を西に得意を造れば道のりも半分、帰る時間も半分ですむではないか。お前の体が参つてしまふぞ。倒れたらどうする。八方ふさがりではないか。」

「たしかにその通りで、わかっています。けれど私の足は八幡の方にか向いて行きません。希望が湧き上つて案外、疲れないのです。所が西は教会どまりで私には暗やみに向つているようで気がすすみません。」私は心の中でこんな問答をしながら今日も八幡に向つて走るのです。東郷から赤間、海老津、遠賀川、水巻、折尾、黒崎。遂に目的の八幡まで販売の区域を拡げたのでした。私の生れ故郷であり、なつかしい思いも多分にあつたでしょう。然し我家も、その周辺も戦災で昔の面影を見ることはできませんでした。その間も人里離れた所に来ると、自転車を降り、座りこんで祈りながら泣くのです。「天のお父様、私はあなたをわかりませんが信じたいのです。私がこんなに苦しんでいるのをあなたはどこ存知です。助けて下さい。三才の子

を一人、置きざりにして出かけるのはつらいです。私が出て行かなくても食べてゆけるようにして下さい。中学生を頭に五人の子供がいました。四人は朝、学校に出かけると三才になるひろみちやんが一人になるのでした。

今頃どうしているだろうか、泣かされているのではなからうか、国道に出て事故に会わねばよいがと心配でなりません。一木も貯えもない者が店を持つことは不可能だと知りながら、幼児が母親にねだるように泣きながら祈りました。主はその祈りを聞いて下さったのでした。主は黒崎のお得意さんを通して、私のために家を建てて下さり、資金や道具一式を備えて下さって、食堂をさせて下さいました。全くの素人で何をどうしてよいかわからない時、三十年前、女中をしていた人が食堂に三年勤めておられる人でしたので喜んで私たちが覚えてしまひまで、ねんごろに教えて下さいました。主が私たちのために使わして下さいました天使だつたと思います。又、お店も八号のぶどうの木に書きましたように、くしきみわざによつて祝福して下さいました。

まことに主は生きておられ、思う所、願う所に、いたく勝ることをなして下さり、行商せずとも豊かに暮せるようにして下さいました。かつて十年間、聖霊なき教会で悶々の情を抱き、苦しみの連続でしたが、長い忍耐と艱難は決してマイナスにならず又、二十五年間の若き日のすべてを人に尽しましたが、その報いは裸で追い出されるような悲しい優目にも会いました。然し、その試練が大きかつただけに受けた恵みは、それは幾倍か計り知ることの出来ない無尽蔵の富となつて返つて来たのです。五人の子供の内、一人で留守番させた、ひろみは夭折し、ぶどうの木六号に永遠の命の証をもつて掲載しましたように、私たちに一層大きな望みを与えて昇天しました。残る四人も今では返つて教えられる程に主によつて成長し、私たちの慰めとなり、楽しみと変えさせていただき、勿体なくて如何なれば、かくも人の子をかえりみ給ひやの詩篇の作者ならずとも、思わず口を突いて主を崇め、ほめたたえずにはいられません。アハシユエロス王は愛する王后、エステルの為に「王后エステルよ、何を求めるのか、あなたの願いは何か、必ず聞かれる。国の半ばでもあ

あなたに与えよう。」と王の寵愛をうけましたが、私を愛して下さるお方は王ではない。

王の王、主の主なる天のお父さまです。私に対し、國の半ばどころではありません。神の國をそつくり私に下さるとおつしやるのです。

ああ主よ……

主はいのちを与えませり

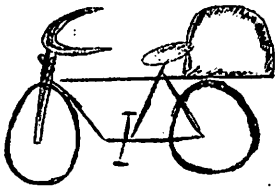
主は血汐を流しませり

その死によりて我は生きぬ

われ、何をなして主にむくいし

アーメン

終り



みことばとかんしや

伊規須 太郎

「ここに近づいてはいけない。足からくつを脱ぎなさい。あなたが立つているその場所は聖なる地だからである。……わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」

今、私がここに立つている事は当然でない、ただ神様の考えられぬ程の憐みと恵みによつて居るべからざるものを居らせて下さつて居るのだ。馴れる事の恐ろしさを聖書に見る時、身が引締まる。かつては「己に死なねばならぬ、私は既に十字架に付けられた筈」と心に言い聞かせていたが、一向に確信がなかつた。しかし十字架を仰ぎ見る時、そこに主と共に私が十字架につけられて居る事実を見る、私はもう完全に死んでいるから感謝。うちにあつて生かして下さる方の前に時々靴を脱ごう。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい」

肉性は当分これで安心と状態を頼ませる。しかし信仰とは状態でなく姿勢の問題だ。止つた水は腐る、恵みの中に永く留ると馴れ易い。しかし主は脈々と流れる。鮮血をもつて朝毎に私を潔めて下さるから感謝だ、絶えず新しい感激をもつて原点を記念しよう。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ。．．．わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから、．．．．．見よこれがあなたのくちびるにふれたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」

私は何かして何かを以て主に仕えようと傾く。しかし煙の満ち、しきいの震い動く神腰にぬかづく時、何かをもつて主を拜すべきだろうか。輝く光の中に立つ時、何と自分の汚い事だろうか、しかし感謝すべきかな主の血はすべてを潔め新しい一週に遣わして下さる、最早何も申し上げる事は出来ない。「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか。人の子は何者なので、これを頼みられるのですか。」

ただ少しく人を神よりも低く造つて、栄えと誉とをこりむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました」

宇宙とその中に満ちるものをわが物と言ひ、国々の民を桶の一掬と言われぬ方が私を顧みて下さるとは！

何と言ひ高い知識、何と言ひ深いあわれみ！この方の前に責任をもつて立とう、この方の声を聞き、従い仕えよう。神様がよるずのものを足の下に置かれ、た事を感謝する。「．．．わたしに知らぬうちに、わたしの思いは、わたしを車の中のわが君のかわらにおらせた」

「信仰の戦いをりつばに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りつばなあかしをしたのである」

今と言ひ時がかげがえのない時であるのに、いつとはなしに私は馴れて、低い所で腰をおろす。しかし神様の御期待は何と高いものであるうか。信仰の戦いを自分では戦えないが聖盟の剣（聖言）による一撃が勝利の転機となつた。口に言ひ表わせない永遠の命の恵を現実味に味わせて下さる主をほめまつる。

「だれでもわたしについてきたいと思ひなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従つてきなさい。自分の命を救おうと思ひものはそれを失ひ、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう」

切なる願ひは待ちながら、私は自分の考える従い方で従おうとしていた、しかし主の御命令は違ふ。どんなに努力しても自分を捨てる事は出来ないが、主がかかつて下さつた私の十字架を負うた時すでに自分は生きていないと知つた。日毎に主によつて生かされ地上において永遠の命を味わひこの驚くべき奥義の道を開いて下さつた事を感謝する。主のように（約一〇）パウロのように（腓三）進んで命を失う者となりたい。

「地を造られた主、それを形造つて堅く立たせられた主、その名を主と名のつておられる者がこう仰せられる。わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える、そしてあなたの知らない大きな隠されてある事を、あなたに示す」

八方塞がりの中で悩みによつて耳を開きあわれみの

言葉を掛けて下さる主はほむべきかな。不安と恐れの原因は主を知らぬためであつた。全能者が満ち満ちつるすべてのものを以て私を満たそうとして今迫つて下さる。言葉の祈りは勿論、生涯をもつて主を呼び求めよう。日毎に新しく、大いなる隠れた事を教えて下さる主に感謝する。

「あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言つてはならない。あなたはあなたの神、主を覚えなければならぬ」

恵に馴れ、高ぶり、背いて行くイスラエルは私の鑑だ。神様を知らずに呻き苦しむ人を見る時、私も同じだつた事と、それをここまで導いて下さつた神様のあわれみを感じするが、同時に恵を忘れる私の弱さを痛感する。しかしここには忘れず高ぶらない秘訣があるから感謝だ。常に主を覚えよう。主の光の中を歩んだ時、常に死ぬ事が生きる道であり、常に捨てる事が保つ道であると教えられた。「あなたがたは、実に、そうするよりにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受けて、御足の跡を踏み従うよりにと、模範を残されたの

である」

私はすぐ人を裁く、忍耐できない。しかし主は背く私のために黙々として十字架にかかり、長い間、忍んで下さった。罪なき神の子が何と言う忍耐！父なる神様に委ねた何と言う謙遜！その後姿が私を一新してしまつた。もう私は理屈を教えたり人を従わせたりすまい。ただ主の御足の跡に従つて行こう、この後姿を誰かが見ているかも知れない。あとは主が業を行なつて下さるから感謝だ。

「……もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、その山にむかつて、ここからあそこに移れと言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう。しかし、このたぐいは、祈と断食とによらなければ、追いつくことはできない」

からし種一粒ほどの信仰もないと、自分に失望していた私であつた。しかし主の前に私は何であろうか。ただ主のいつくしみとあわれみによつてこの赤子が生かされているのに、大人心になつていた自分を見出して悔い改める。信仰は骨や形の問題ではなく、活ける主に対する姿勢の問題であつた。

主がやつて下さる時、どんな大山もどんなてんかんも跡形なく消え失せる。もう一度姿勢を整えて祈り、主にのみ望を置こう、状態はいよ／＼暗いけれども夜明けが近いから感謝だ。

「ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、恐れるな、わたしはあなたをあがなつた。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのものだ」

ここは永い間、実感として受取れなかつた。しかし創造と贖いの間に、私自身の黒い卑しい生涯を見出した時、輝く様な十字架の贖いが、くつきりと浮かび上つて来た。神様のものとは何と驚くべき身分だろう。極端から極端まで何と驚く可き救だろう。

この方が責任をもつて下さるから、水火の中も守り、人を捨てても救い、又、末の世にも正しく生かして下さるから感謝だ。無きに等しいものを敢えて選び給うた神様のあわれみを覚えて、日毎に感謝する。「わたしは主のはしためです。お言葉どうりこの身に成りますように」「……主のお語りになつたとが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなこ

とでしよう」

見掛けは一応立派でも、聖言に対する壇が崩れてい
るうちは、私の身に何も起らなかつた。しかし言葉
は神であると気付いて絶対服従の姿勢をとり、自ら
橋を落して生涯を主に向けて呼求めた時、火を以て
私のすべてを焼き尽して下さつた（王上一八）。再
び陶土（古い生涯）に戻れなくなつてしまつた。

み言葉に従つたマリヤの中に業を行なわれた神様は、
今も私の中に同じ事をなし給うた。生ける主はほむ
べきかな！私の魂は主をあがめ私の霊は救主なる神
をたたえます。

「彼はわれわれのことがのために傷つけられ、われわれ
の不義のために碎かれたのだ。．．．その打たれ
た傷によつて、われわれはいやされたのだ」

かつて私は何か（罪の）行為の結果として病気になる
と考え恐れていた。今回のカゼについても確かに
心当りはあつた、調子にのつて夜更かしを続けた事
だ。しかし、今やキリストイエスにあるものは罪に
定められる事なしとあり、夜更かしに刑罰を加えら
れたのではない事を知つた。咎、不義とは、神様が

いやしたとおつしやるのにそれを信じない不信の事
であつた。主は自ら碎かれて明らかな保証となり、
私の不信を全く打碎いて下さつた。感謝。病気が病
気でなくなり、神様の前で休息と交わりを樂しむ素
晴しさ！

「わが義人は、信仰によつて生きる。もし信仰を捨て
るなら、わたしのたましいはこれを喜ばない。しかし
わたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰
に立つて、いのちを得る者である」

一度健康を失つて見ると、堅になつて居れる事も、
寒風に吹かれる事も、体を屈め得る事も．．．
実は当然でなかつたと知り、健康の有難さが身にし
みる。しかしその感激が僅か一、二日で薄れてしま
うとは、何と私は弱いものだろうか。恵に感じ常に
柔かくお従いするにはどうしたらよいだろうかと考
える、結局この問題についても、深く神様の手に落
ち込むほかはないと教えられた。こんな者を十字架
の血の故に「我につける義人」とお呼びになり、信
仰によつて生きるもの、信仰によらねば生きられぬ
ものと定めて下さつたから感謝だ。「あなたの位を

「堅うする」とダビデに約束し給うた方、「主の靈を内においてわが定めに歩ませる」とおつじやつた方が、今も私を保ち全うして下さるから感謝だ。肩の荷がすつとおりに楽になりました。

「いのちと信心とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によつて、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによつて、わたしたちを召されたかたを知る知識によるものである。また、それらのものによつて、尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである」

世の流れは激しく、弱く小さい私はたやすく世の欲に捕われる。状態を見れば失望よりほかにない。しかし主によつて与えて下さる神様の約束は何と驚くべきものだろうか、ちり灰の様な被造物に神の性質を与え、すべてに勝たしめて下さるとは！

罪の世に勝ちて深く歩む。この身はときわに主の宮なり、あゝほめたゝえよ主イエスの血潮は、すべて罪より我をさえ潔む。主が一たび献げられた事に

より、私の上にこの事が成就されたから感謝。「たとい、わたしたちは不真実であつても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」

人生を何にかけるべきか・・・私は青年時代から求め続けて来た。ある時は祖国愛（？）に命をかけたが、それは正しい道ではなかつた。しかしこの罪人の為に黙々と死んで下さつた神の子の御愛と、神の性質を与えて世のすべてに勝たしめ給う救の尊とさを知る時、私もまたこの方に命を傾けてお答えしようと思ひ。しかしどんなに努力しても真実であり得ない自分には全く失望する。けれども神様の真実に歩ませて頂けるから感謝だ。

「死は勝利にのまれてしまつた。・・・だから愛する兄弟たちよ。堅く立つて動かされず、いつも全力を注いで主のわざに勤みなさい。主にあつては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知つているからである」

終りのラツパの響きと共に、一瞬にして変えられると言ひ約束は遠い将来の事ではなかつた。このたび

の新年聖会で王なる主はこの事を成就して下さった。恵まれ歩み出すとサタンは目を覚して激しく攻撃して来る、自分の状態を見、失敗を見る時、恐れたり失望したりする。しかし主は死の王サタンに完全に勝ち給うた、蛇の頭は既に砕かれ、今はその尻尾がうごめいているだけであつた。恐れる必要はなかつたのだ、主が勝利を得させて下さるから感謝だ。

堅くみ言葉に立とう、勝利を与えられた者として歩もう。歩むとすぐ内から平安と喜びと力を満たして下さつた、生ける主はほむべきかな。

「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである」

聖書の光で私の古い生涯を照らされる時、その罪と死のさま、不従順、肉のけがれ、怒りの性質に自身で愛想が尽きる。こんなものを誰が頼みるだろうか。．．．、その私を救い、生かし、甦らせ、天上上で座につかせて下さるとは、何と言ひ驚くべき御

愛であろうか。この極端から極端までの救いを、恵みにより信仰によつて与えて下さつた事を感謝します。これはあなたの聖名のためでした。「価なくして受ける事」に対して私の心に何かわだかまりがあつたが修養生活の三度三度の食事は、「働きの無い者に恵みを注いで下さる福音」を私のうちに徹底して下さつた。福音そのものであるイエス・キリストをほめまつる。

「よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けられる者でなければ、そこにはいることは決してできない」

無心な初生児は両親の痛みも喜びも知らず、母親が自分の命を捨ててもと覚悟した事も知らず、愛の手におかれてただ眠り続けている。これは神様の前における私の姿だつた。神様の前で人間の知恵や知識は何物だろうか。そんなものであるのにすぐ「大人心」になつて神様のお言葉が信じられぬなどと考える。神様の恵を止めていたのは私のこの心だつた。十字架の言を無条件で受入れた時、神様の驚くべき恵が私の中に満ち溢れた。この奥義を幼な子に表わ

して下さつた事を感謝します。そしてもう一つ、十字架に敵対するとは大声で逆らうばかりでない事を悟らせられました。

(一九七四・二・二七記)



雲仙・長崎・島原旅行記

正野 義雄

- 一 この旅の紅葉に少し早けれど
- 一 鹿島駅すぎれば単線長崎行
- 一 広々とつゞく稔り田佐賀平野
- 一 花八ツ手キリシタン哀史島原城
- 一 島原城遺品に残る殉教史
- 一 島渡る十字架何も語らずや
- 一 君の名の涙のあとや真知子岩
- 一 湯の宿へ穂芒の道をのぼりけり
- 一 トンビ舞ふ秋の野母岬旅を果つ
- 一 野母岬秋の鳶舞ふ船だまり
- 一 秋深し長崎坂町港町
- 一 秋ざくら聖堂閉づる弥撒のあと
- 一 秋深し殉教の像合掌す
- 一 秋深し夕日に潮の香室に満ち
- 一 礁をうつこともをりをり秋の汐

コスモス

松山 詔子

どの秋のコスモスだつたかしら
聖書の中に花びら2枚

まるで、うすい紙のよう・・・

でも、あの優しい淡い色を忘れずに、ととめている。
目を閉じると

ああ、コスモス畑が果てしなく広がる。

秋色の風にも陽光にも染まらず

あくまでも可愛く、美しく、優しく

笑いながら語り合いながら揺れている。

ピンクの中に、たまらなく・・・

たまらなく好きな赤い色

細い、やさしい葉を、葉に似た色の

かわいい草ぐもが、すーとわたつていく。

神様、ありがとうございます。

こんなに、たくさんのコスモスを一本一本愛し

大切に大切に、つくつて下さつて・・・

コスモスは神様のお心です。

コスモスは一番好きな秋に、せいいつばい天を見上げ、神様に感謝することを、忘れません。

終



続ビヨコの歩いた才一步

安東倫子

前号では、主人（彼）が私たちの結婚に至るまでの、あらずじを投稿いたしましたので今回は私が、それを補足させていただきます。

四四年一月末の最初の出会いから彼と親しくなるのに半年位ががった。同じ大学の学生自治会役員としての付き合いが大部分であつたが、私が当時、学校と職場とのバランスがとれず勤務先の銀行を辞職したいと願つてゐた。

私の心は落ちつかず何か、するものが欲しかつた。彼がクリスチャンで教会へ行つてゐることを知り、私も心のささえとして教会へ行きたいと思つてゐた。彼に話すと一つ返事でO.K.これから親しく話す機会を得た。ある日曜日、伝道集会から帰宅の途中に彼は私に「友人として付合つてゐるのだからそのつもりで。」と言つた。私は彼に対して好意を感じてゐたのでシヨックをうける。以前、大学の友人から「彼には〇〇さんという親しい人がいるのよ。」と聞いていた

だけに私のふくらんでいた夢も、しぼんでしまつた。

数カ月たつたある日「クリスチャンホームを一緒に作つてくれないか。」というプロポーズ。（初め、この意味が解らず何か施設を造るのに、良きヘルパーとなつてほしいという意味なのだろうと思つてゐた。後でプロポーズと解り、びつくり）この人は何を考へてゐるのか？数カ月前までは自分を意識するなと言ひ、今度はプロポーズ。どうすれば良いのかと考へる。しかしプロポーズを断る理由はなし。一週間たつて承諾の返事をした。今、考へる何と恐れを知らない者だつた。頭を冷やしてみると、クリスチャンは酒、タバコをやらぬ。日曜日は礼拝を守る。その他の日でも集会は、たくさんある。いつ遊びに行く時間があるのか。テレビも映画も、デパートにも行けないなんて、目の前がまつ暗。ああ、とんだことをしたと思つた。

四五年三月無事卒業。結婚について真剣に考へるようになる。私は新しい職場を与えられ花嫁修業に余暇を費やす。（月・木・洋裁、火・茶道、土・華道、月・ピアノ）この間、私は信仰については全く、かわいたものがなかつた。日曜日の礼拝と伝道集会に出席させ

ていただくことを目標としていた。これだけで別に何も感じなかつた。四六年四月洗礼を受ける。この時から彼は私に「集會に近づけ。聖書をよくよめ。祈る訓練をしろ。」と口をすつぱくして言う。なにしろ「のれんに腕おし」の私には、彼の願ひとはうらはらに、信仰心はおこらなかつた。それもそのはず私の計画では一年も教會へ行けば何とかなるの心で、いつまでたつても、変わるはずはなかつた。しかし神様は私の思いとは、はるかにこえた計画をもつて私を導いて下つた。彼と私は一週間に一度、三十分話す機會を得た。その度に彼は憂うつな顔をした。私に會うのが苦痛のように見えた。(へ実は私の信仰が一日でも早く確立しクリスチャンとして主の前に立つてほしいと願つていた。)彼は私に注意すべきことを遠回しに言う。何が良い、悪いとはつきり言つてほしい。このままではだめだと思ひ、ノート交換を提案(後に「愛となくさめの記録」と命名。後の証拠物件である。)現在に至つてゐる。この時、二四才の私に、いくつかの縁談があつた。両親はこの世的に良縁であれば嫁つがせたいと思つていたが、その氣なしの私は全く、うけつけず何

かといつては逃げまわつて。この時、私は神様に祈ることを教えられる。「神様、あなたはすべてをご存知です。私たちが結婚することは、もう二年前から約束されています。この約束を必ず成就なして下さい。」と信仰うすき者は、ひたすらに祈つた。祈ることにより平安を与えられ、時期をひたすらに待ち望む者となして下さつた。この間、彼にもいくつかの闘いがあつた。私は彼に何もしてあげられない。料理ひとつできない者に「教會へ行くだけでいいから結婚してくれ」という言葉をそのまま信じていた。このことばのみ、たよりとしてきた。

四七年三月二八日、彼が神妙な顔をして、我が家へやつてきた。東城野にある公務員宿舎があたり、結婚させてほしいとのこと。四月一日の夜、結婚式は四月九日と決定したからと彼の報告、私の両親は啞然とする。父、いわく「猫や犬の子ではあるまいし、人が結婚するのですよ。あまりにも時間が足りないの、その話は、もう少し考えさせて下さい。」彼はツヨボンとして帰る。私は職場のこともあるし、頭が痛かつた。私の両親は彼の家族のことについては全く知らず、

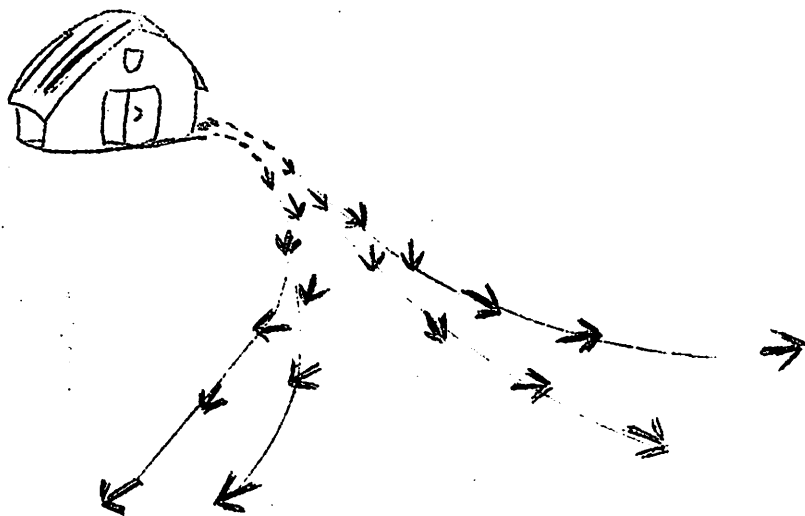
「ご両親に、お会いしたい。」という事で一週間後に彼の両親と対面。この日が事実上、結納となる。

伊規須先生ご夫妻に仲介の勞をとつていただき五月二八日を式日と決定。双方の両親にとつてクリスチャンの結婚式は初めてのことですべてが目新しかつた。彼のことを良く知らぬ祖母は「結婚は女のつとめ。いやになればすぐにでも帰つておいで。」という始末。さすが、心臓の強い私も変な気持ちになつた。父は夕方になると、はなれにあるピアノにむかい結婚式の前日まで「ホタルのひかり」を弾いていた。神を知らず、彼を知らない私の家族の姿であつた。さんさん親を、ひやひや、おろおろさせたこの私も、いつくしみと、あわれみに富む主が祝福して下さり、無事、挙式。挙式の夜、二人で伝道集会へ。前田教会創立以来、挙式の日の夜の集会へ夫婦で出席させていただくのは、私たちが、初めてとのこと。かくして良夫と悪妻のカップルはスタートを切つた。一週間の各集会に出席させていただいている。金曜日の禱告会には榎本先生ご夫妻を始め、伊規須先生、高木先生ご夫妻、野村先生、林正二郎兄、調姉、私たち二人が多くの聖徒方の為に

主の前にあつてとりなしの御用をさせていただいている。初めの頃、（今も変わらないが）私の祈りは、祈とはほど遠く、祈ることばさえしらず、集会から帰つて泣いてしまつた。榎本先生のお話の中で「祈は人に聞かせるものではなく主にきいていただくもの。赤ちゃんの泣き声で、お母さんは何が必要かどうかを知りつくしてきますよ。」という、御言葉に励まされ今日に至つている。生活においては、石炭でおふるをわかすのは生まれて初めて。魚や鶏が大きらいで、肉屋、魚屋の前をとあるのもいやだつた私は困つてしまつた。家の大先生（？）から、魚を三枚におろすことや、鶏の皮をはぐこと等。tcを教授された。私はうす味、彼は濃い味と二人の好みは全く反対。このように二人が同じ屋根の下に、けんかもせず過させていただく。神様の祝福がなくては何もできない私。器用な夫と不器用な妻。人の目には変な夫婦だが、神様は願うこと思うところのすべてを善にして善をなして下さる。すべてをご存知なのである。この方にすべてを、お任せして二匹のヒヨコは、あちらに、こちらに頭をぶつけて一歩一歩と天国に続く道を歩ませていただいで

いる。二匹のヒヨコのために、多くの皆様にお祈りいただきましてありがとうございます。もう一匹、生まれてまいりますヒヨコの為に、続けてお祈り下さい。

終



” 旅 から ”

安部 タマエ

わたしの魂は主をあがめ

わたしの靈は救主なる神をたたえます

(ルカ一・四六〜四七)

「姉さんは東京に行きなさる・・・」

若松にいる弟の嫁の一声に驚き、すぐ姉に電話をすると「永住します」との事

「あんたも行かんね、勿論出してやるよ」の言葉に、離れ難い懐いが募つて、甘えてついて行くことに決めた。

榎本先生にお話した時、「良家を訪問する時野村さんに御言葉を書いてもらいます」とお聞きし、お土産に野村先生にお願ひして御言葉を書いて戴きました。「色紙代だけを戴きます」とおつしやつて下さり、嬉しくて、お言葉に従順に従ひ、榎本先生と野村先生の御厚情の程深く感謝いたしました。

四月二八日の朝、教会で奥様に御祈りして戴き、御錢別迄賜り誠に有難く感謝でいっぱいでした。

八幡駅発屋前の汽車に乗り、姉に車中昼食の世話等種々してもらい、窓外をとり過ぎて行く野山や畑、家の話しをし乍ら、一緒に旅行するのは最初の最後だと、思いをかみしめました。

外は快い天気で、緑の中に、いつぞや見た紫色のつゝじが今はもう数少く残っているのが淋しく感じられました。

夕方倉敷に着き、甥の嫁さんと、嫁さんのお父さんに御言葉の色紙を良く説明して贈りました。

翌日は大原美術館で種々の名画を見「恵まれた女よおめでと、主があなたと共におられます」(ヘルカ・一・二八)をつくづく感じました。

外では武家屋敷のたたずまい等興味深く見、レストランでサンドイッチ・牛乳・アイスクリームで昼食をする。午後、甥の思いやりで瀬戸内海の島々や、四国の見える山にドライブしようとして巡り巡って中腹まで登ったが、成程よく晴れた日で緑色の大小様々な島が眺められました。車に酔って山頂はあきらめてしまいました。

翌日、姪が来てくれたので色紙を渡し、午後岡山か

ら国鉄に乗り、車窓から姫路城・大坂城・名古屋城等を見、豊川の川上を望み榎本先生を想い出しました。静岡ではもう日もとっぷり暮れて、東京駅に上の甥が出迎えてくれ、北区の「つばめ荘」に着いたのが八時過ぎでした。

甥と、その従兄弟に色紙を手渡しました。

翌五月一日、上野に出掛けた。先ず公園の広さに驚き、国立西洋館に行き、そこでロダンの地獄門等多数の美術器を見、外では官様の陸軍将校の像を仰ぎ、また全国の諸大名の献上した石灯籠が両側に立ち並ぶ東照宮の参道をふみしめ上り、昼食は茶店で「みたらし団子」を食べ、午後も由緒ある史跡など種々を見、不忍池には行きませんでした。西郷隆盛の銅像に会つてきました。

夜銭湯に行き、広いのにびつくり、此所等の五倍位いの掛り湯が並び、その前で皆腰掛けて洗っていた。

翌日は浅草に行く、中店を多くの外人と一緒に歩いた。帰りに姉が「みたらし団子」を買った。

翌日山の手線に乗った、ラッシュニアワーで何も見られなかつた。上野では高架線の下が食料品の市場だつ

たりして驚いた、昼食はそばやですませた。

翌日東京駅を出たら排気管が道路の右手に出ておりそこから車を拾つて窓から二重橋を見、霞ヶ関ビルにのぼり緑に包まれた皇居・首相官邸、四方の家並を、彼所が浜離宮と、眺め乍ら降りた。諸官省の立並ぶ桜田通りの柵の木並木は房々と明るい花をつけていた。日比谷公園を散策した。耳にしたこともない様な流儀の生花の展示会もあつた。藤棚テニスコート、林があり綺麗な花の咲き乱れる花園、噴水、野外音楽堂のベンチで一息入れ、休憩所で昼食にスパゲッティを食べた。亀が四ツ五ツ甲羅を干している美しい庭園もあつた。地下鉄に乗つたら銀座に出た。

翌五日は雨だつたので、あちらこちらに便りを書き乍ら一人で留守番をしていた。

翌六日は姉に休息してもらう。伊規須先生に書いて戴いた教会に礼拝することが出来なくて御面倒をおかけしたことを誠に済まなく思います。

翌日大阪まで新幹線に乗る、小田原の少し手前で家の間から真白い富士山らしきものを見る。真正面からは雲海の中に頭をかくし、時折り雲間に見える程度で

あつた。緑の裾野はもう広い広い、昔の古戦場を偲ばせていた。風光明媚な熱海、六甲山まで開かれた神戸大小のお城・舞子の浜等を見、夕方住吉区の長居に着いた。

翌日は雨だつたので洗濯をする。

翌日奈良へ行く。バスを降りて大きな門を潜ると、左側に鹿が喰っており、右手に池があつた。そこをずつと行くと大仏さんだ。裏の山を二月堂に進む。鐘つき堂でわらび餅を、お茶屋でおそばを食べる。姉は墨と硯を買う。若草花山を左に見ながら登る、松と楓の林、苔むした小川を渡る時山の匂いがした。

春日大社の無数の石灯笼、広い公園の松、鹿、子供を外向きに背負つた外人さん、下つて五重の塔、猿沢の池、さらに下つて右に行くと電車の駅だつた。大阪に着いて群衆をかきわけて連れて行かれた所は水掛け不動山でした。

翌日は京都に行く。清水の舞台を上から下に、下から上にも見上げて鑑賞し、手洗場を見て、桜並木の中腹で昼食におにぎりを食べた。狭い道を下り乍ら生八ッ橋を買う、おもしろかつた。

知恩院・平安神宮・車の中から二条城・御所を、こ
こかしこと嵐山に着きました。渡月橋を渡り苔寺へ行
く。昔からの鎌倉式庭園で上下二段構で上段は枯山水
式、下段は池泉廻遊式庭園で、中央の池は「心」字形
になつており、庭の苔は百二十種もあるそりです。

外に出てお茶屋でとろろそばを御馳走になり、三条
の橋の袂に正座して御所を伏し拝む大きな銅像をパス
の窓からチラツと眺め、奈良・京都での神社仏閣の大
宮人の姿を忍びました。

翌一日姫路で姪と一緒にになり、レストランで昼食
を取り岡山迄送つていただきました。岡山迄姉にも同
伴していただきました。

六月初め若松の弟から十二指腸潰瘍で手術するから
留守番に来てくれと言われたので、御言葉の色紙を持
つて行き「御祈りしていただいたので信仰を持つたな
ら治る、神様は生きていらつしやる」といつた。胆石
の痛みは三日で治まつたが、入院して手術してしまつ
た。私は弟に苦痛に耐える力を与えて下さるように祈
つた。

近所の家に二度も空巢がはいつたのに、この度の留

守番役は神様がお守り下さつたと感謝申し上げます。

十月初め、永野サト姉が永眠された。告別式のあつ
た晩、永野さん宅で「一人で歩くと誰かがついて来る
様な足音がする」と言つておられたおばあちゃんを永
い間お守り下さつたことを感謝しお祈りいたしました。

九月三〇日から左の膝が痛いなあと思つていた。教
会でお祈りをして戴いた。一〇日頃微熱もある様なの
で二日程冷湿布をしたが効目は無く、一二日は歩行困
難となり、済生会病院に連れて行かれた。レントゲン
の結果は良好水もたまつていないから老人性の痛みで
しよう、そして膝の中につきささつた注射針に小さ
い注射器を接合しながら「薬を入れたからこれで良か
ろう」と言われたが、その後いつころに効き目は現わ
れない。二三日、自動車に乗つて散薬を貰つて帰る。

三〇日朝、膝が曲らないことに気付いて温湿布をする
と翌朝は痛みも薄らいで具合がよい、続行することに
した。二・三日して膝を見たら一廻り小さくなつてい
た。皆様方御忙しい中なのに、前田姉一日一章を持つ
て来て下さる。岩井姉に苔を戴く、高木姉見舞に来て
下さる。野村先生から御見舞状を戴く、榎本先生御夫

妻、見舞に来て戴き、お祈りをして戴く、奥様のお造り下さいましたお萩餅の甘くて美味しかつたこと、夜二人で味わいました。教会の皆様方のお祈りありがとうございました。物療室で下地兄にお会いし御計らいにより、年末に右の足に捕創具をつけて戴き、お蔭様で足根骨が痛まなく好都合です。

それから市の福祉課から御見舞金を戴くやら、又一月から主人は日曜日にアルバイトを頼まれて、トラックで送り迎え昼食付で、遊びには行かないし、お正月は教会で、主はいとやさしく我と語り、乏しき時には満たし給う。”と本当に私達の財布の中身まで十分に満たして下さつたこと感謝いたしました。

年末の三〇日の礼拝は、主人のたつての申し立てにより若松の弟の家に快復したのを見て貰うため、お祈りして失礼しました。

“あなたはわがすわるもの、立つをも知り遠くからわが思いをわきまえます”

(詩一三九・二)

二月七日、朝起きるとお腹に重い物がかかえた時の様な重圧感をおぼえ、その後ますますひどくなり、し

まいこともそこに椅子に腰をおろした。九時四分、手をついて立ち上がろうとした、さあ腰が痛くなつた立てない、又じわつと椅子に腰をおろし、背をもたせ、腰を浮かす様な姿勢をとつてお祈りをした。先生ならどんな御言葉をもつて御祈りして下さるだろうかなと思つていましたら、二時間程して快くなつたお腹も軽くなつていた。イエス様がお癒し下さつたと感謝申し上げます。

後で考えますと一〇月の足の痛みの時、瞬間的に一息か二息づつ、五・六回腰の痛みのあつたことを思い出しました。

末永弘海先生が勝利と平安のうちに御召天になりましたとの報にギクツと致しました。ありし日のお姿が忍ばれます。


終



旧会堂とその周辺

伊規須 太郎・泰子

◇西鉄北九州線、前田町で降車し電車通りを東に約百歩行くと左側に前田教会があります。この道道を歩き続けてもう何年になるでしょうか。ある台風の朝、電車も動かない中を陣山の寮から早天祈禱会（六時開会）に急ぐ、桃園町のあたりで建設現場のトタンがヒューヒューと飛んで来る、首をすくめながら教会に走り込む、それこそ火が降ろうが矢が降ろうがという励み方でした。時には家内と同じ電車になります、私が先に降りると私は急ぎ足で彼女はゆつくり、私があとならその逆で結婚まで物もろくに言いませんでした。◇教会に向つて左側は今オートバイ屋になつていますが、かつて○と語り **桶屋** があり変つたおやささんが居りました。教会の前庭に材料や製品が侵入して来たり、御本人がはいつて来て放水したりで色々困つたものです。騒音の問題はあとで述べます。◇教会の入口に今は照明入りの高い堅型 **看板**（神は愛である）と横長の塗り看板があります、私が来は

じめた頃の事は記憶にないが、暫らくして青い三角形の看板  が立ちました。スカシの入つたレンガ塀の外側に **掲示板** があつて集案内が出ていました。火く土、毎朝六時早天祈禱会とありましたが「く」が小さかつたので、火曜と土曜しかないものと思ひ、土曜日の集会にはじめて出たようです。

◇私が教会を探している頃屋根に **十字架** は立つていなかつた様です（雨水滲入のため一時取外し）すると何を手掛りに探して当てるのでしよう。恐らく電車の窓から数秒間、会堂と看板を見たのでしよう。これが私の生涯の転機となりました。私の上にも亦神様の奇しき御手が働いて居りました。

◇門の **鉄扉** は比較的新しいものですが片方が少し下がつた為か門が通しにくくなりました。門から会堂までの **コンクリート道路** は第二次増築のあとに出来たと思ひます。前庭の **ひのき** も今は少々変形してはいますがはじめはなかなか奇麗なものでした。当時私はタルキを焦して **垣根** を作つたのを覚えていますが、今はどこだつたかわかりません。◇当時の会堂は今より引込んでいて **玄関** は左端に

突出て居り、外階段が四、五段ついています。この名写真が何枚が残っています。両開きの扉の縁は緑色、左側の壁にはN先生の達筆になる看板が下つていました。今の玄関は増築で二間前に出ました。すぐ右側にセバレートクーラーのファンがあります。暑がりの私はドアを押す前に廻つてゐるのを見て安心したものです。

◇増築前の玄関から右は広い壁でした。たしか桜の木がありました。壁の前で写真をとると平原の様な感じになります。N御夫妻のバリツとした姿がアルバムに残っており我々仲間は今でも「洋行帰り」といっています。

◇壁の右端近く隣家との境にいちどくがあります。これは例話に登場する有名ないちどくで、壁を傷めぬよう切つても切つても芽生えて来る、その強靱な命がイエス様の一言で断られたと言ひあれます。これも隣家の建築の際になくなりました。

◇今は玄関を入るとすぐ右がトイレで最近水洗化されたばかりと言ひのたまことに短命で終る事になりました。こゝにトイレが出来るまでは教会専用のも

は無く牧師館のを使わせて頂いていた。クリスマス祝会の時は大変で私達青年は周辺の空地を掘つて戸板を立てたり苦労したものです。

◇昔の玄関にはすのこが敷いてあり左側壁面に靴箱がありました。クリスマス祝会の時など下足番に立ちましたが、狭かつた為か取り違える事も多く、最後にどうしても足りなくなつて靴を買つた事もありました。夜の集会など時々靴泥棒が来ていた様で、増築後、靴箱が直接見えなくなつてから私も二足やられたように記憶しています。

◇はじめの頃の受付がどうなつていたかはつきりしません。ベンチは中央に数脚ずつ二列あり窓ぎわにも置いてありました。お話によると献堂時は十脚だけたそうです。最初にも何脚か追加されたのでしよう。最初に早天祈禱会に出席しましたのでN御夫妻T兄M兄など先輩方が居られた筈ですが勿論何もわからず後の方のベンチに座つていたのでしよう。当時の私は海軍の三種軍装（緑色の開襟スタイル）を着ていて、挨拶する時はパツと足を引き付けて不動の姿勢をとつていたそうです。勿論自分では意識していませんでした。

帰り際には時々先生とお話しました。イスラエルが紅海とヨルダン河を経てカナンに入つたから救は二段階あるのでしょうか。・・・などとお尋ねした事がありました。間もなく神様がそんなに愛して下さるのなら私もその方に従いたいとバプテスマを志願し、教会に来てから半年後に受洗しました。

当時のベンチは今の黒い十八脚で、必要な時に起して金具でとめる聖書台が付いていました。起立する時にガチャ——音がしたり集会中にボタンと倒れて聖書が落ちたりしました。又、金具がグラ——して、何個所もねじ込んだりしたものです。増築後に白い十二脚が出来、そして全部が固定式聖書台となりました。新会堂には老人席用として楽な形のベンチを作ろうと計画されていますが、その聖書台は鳥取信和教会型（挿し込み式）にしたらと言う話もあつていました。果してどうなつていてでしょうか。

◇ベンチの **座ぶとん** は今より随分薄いものでした。しかし私はそれでも暑いといつて夏は使わなかつた事があります。会堂新築当時の **上ばき** は藁ぞうりです。東郷からK兄が仕入れて備えて下さつたが鼻緒がすぐ

切れぞうりもすり切れるので、耐久力のある竹の皮ぞうりを大分県の日出から買つて備えられたそうです。ぞうりは入口のボール箱にはいつていました。鼻緒の切れた時皆さんと一緒に大分立てたものです。掃除の時、足のせの所にぞうりの粉が沢山落ちて足くせの良し悪しは歴然でした。その後スリッパに変わり、今はかなりの方が専用スリッパを置いておられるようです。

◇会堂は最初は床板の黒い部分だけで、私の印象では少し暗かつた様です。 **照明** が白熱電球だつたため

かもしれません。蛍光灯になつたのはいつ頃でしょうか。当時前田小学校の地区会か何かにか会堂を貸した時T先生が「蛍光灯のついたこんな所を貸して頂いて有難いね」と生徒に話されていきましたからまだ蛍光灯の珍しかつた頃でしょう。その頃、米国衣料のバザーがありました物の無かつた頃で私も買い求めて暫く着ていました、私共も色々働いた様に記憶しています。S姉とYが会計でした。衣料の吊り下げられたまの会堂で夜の集會が持たれ日が始めて司會をしました。

◇ **暖房** の歴史はなか／＼変化に富んだものです。

最初は七輪にやかんや鍋をかけて通路に置きました。早天の時はヒビの入った大きな火針を持つて上つたり下つたりしました。ダルマストーブ時代のある日、教団の議長が来られて早天の御用をされました、私がストーブ係で火をつける煙がもうと立ちこめゴホンととお話も出来ぬ様な事になりました、物置から出したばかりで保管中に塗つたグリースが燃えたのではないかと思いました。セントリーストーブ時代もありました、たき方にコツがいりました。その当時はたきつけや石炭の準備もさることながら煙突掃除がなかなかでした、横行煙突の傾斜を伝つて雨水が入るのも閉口で鉢巻をしたり工夫したものです。石油ストーブ・ガスストーブで楽になつたと喜んでゐる中に遂にヒートポンプが付き暖房はボタン一つとなりました。

◇冷房の歴史は、先ずキッコマンのうちわが受付に置いてあつた時代です、当時は隣家N宅の鯨を炊く臭や風呂の煙を考へて窓の開閉をしました。扇風機が一つ二つと入り壁にメラリと並ぶ様になり今度はクーラーが二台三台四台とはいつて、冷房がもとで冷戦が起る始末となりました。私がクーラーを扱うと冷や

す冷やすと眉をひそめる方もあつたかも知れませんが、そうばかりでなかつた事をおことわりしておきます。

◇巾二間奥行一間の講壇は見なれたせいもありましようが丁度よいものでした。ごまは増改築の際も変化がありませんでした。変つたものと言へば二代目の教卓が出来て初代のものは別館で8日用に余生を送つてゐる事、オルガンが壇の上につたり下つたりした事、その他小道具にも若干の変遷はありました。テープレコーダーがいくつも並ぶようになったのはいつころからでしょうか。講壇で忘れられないのは藤村老先生です。大きな黒い背広でいつもニコニコ、会衆に背を向けて椅子の前に跪き「神様・・・」と祈られる姿は今でも目に浮かぶようです。それより前、献堂記念聖会には末永先生が来られたそうですがそれは知りません。もう一つ記念の為に敢えて書きますが、教卓の前あたりに立つと丁度その下がトイレで、鼻をうごめかせながら神様をほめたたえたものです。

◇講壇うしろの壁はクリスマスのバックや新年標語の掲示場所であり時にはスクリーンともなりました。殊に除夜会で午前零時に標語をサツと解きおろすのは

何か面白い感じて今でも忘れられません。

◇講壇螢光灯のうしろに **讚美歌かけ** があつたのを御存知でしたでしょうか。それ以前は足の付いた大きな木枠を使つていましたが、私達が考えて天井の棧のかけに輪のついた針金を取付け必要に応じてとり出す（飛行機の脚の様に）事にしてからずっと活用されてゐるようです。

◇礼拝用の **オルガン** はたしか二代目です。オーガニストの変遷もいろいろありましたが私達はK姉を忘れられません。

◇私が教会に来た頃はまた **柱時計** がなく、集会の都度先生が目覚し時計を持つて来られていた様です。その後M兄の受洗記念に今の柱時計が献げられました。が、これももう二十年近く働いています。

◇第一次の **増築** は西側に一間張出すものでした。例のS工務店が古い壁を落した所へF兄の結婚式の話があり、親族の反対を押して教会でやつてもらう事にしたので是非お願いしたいと壁無し会堂で挙式されました。その前日私が掃除をしていると暫く見えなかつたM姉が来られ手拭をかぶつて掃除をして下さつた事、

花嫁が年若い方であつた事等々いろいろと記憶に残る結婚式でした。第二次増築は南へ二間、第三次増築は東側に和室と拵がつただけ神様は一杯にして下さいました。

◇昔は白壁に緑と茶だつた **室内塗装** が今の卵色の壁にグレーと薄茶に変わったのは何年か前にK兄の奉仕によるものでした。その時、釘穴があまりに多いので注意をうけたものです。それまでSS祝会など全部会堂でやつていたので必要に迫られてこういう結果になつたのでしよう。私自身もストーブの煙突を針金でちこちと引張りだいた釘を打つたものです。

◇会堂の **お掃除** は私達青年の楽しみでした。体力があるので苦にならないし、あとでは牧師館で夕食を頂戴しながら交わりがありました。考えて見れば随分御迷惑をお掛けしたものです。最初はベンチを動かしながら掃いて拭いていましたが何時の頃からかベンチを立てる様になりました。モップを使わずぞうきんを手につかを這つてゐると東南の隅近く床板が腐食して穴があいていました。牧師館の天井が出来るまでは、おかすが直接見えたりすうです。

「イエス様が私の心をこんなに奇麗にして下さる」

「イエス様の身体を拭かせて頂ける」と多くの聖徒方が喜んで奉仕されましたが新会堂は油ぶきになるそうです。教会でぞうきんを縫う時が一番うれいとい涙を流していた女子学生がありました。〇兄の作られたぞうきん干し台もなかなかの傑作でした。

◇クーラーの無い時代は集会の都度はずれにくい 窓をはずしたりはめたりで相当習熟しましたが、それもいつの間にか忘れてしまいました。三回の増築で最後まで残った窓は東北隅だけとなりました。欄間は最近アルミサッシになりましたがガラスの少ない時代は短寸のものが所々にはいつていました。東側外壁には兄の少年時代に 鳩舎 がありました。間もなく撤去、隣家の畑の隅ではジョン君が淋しそうな顔でこちらを見ていました。

◇別館 はかつてN氏が建てたもので一旦他に渡つていたものを土地と共に教会が買収しました。SSの教室が楽になつたと喜んだのも暫くでクラス数が増して再び足りなくなりました。

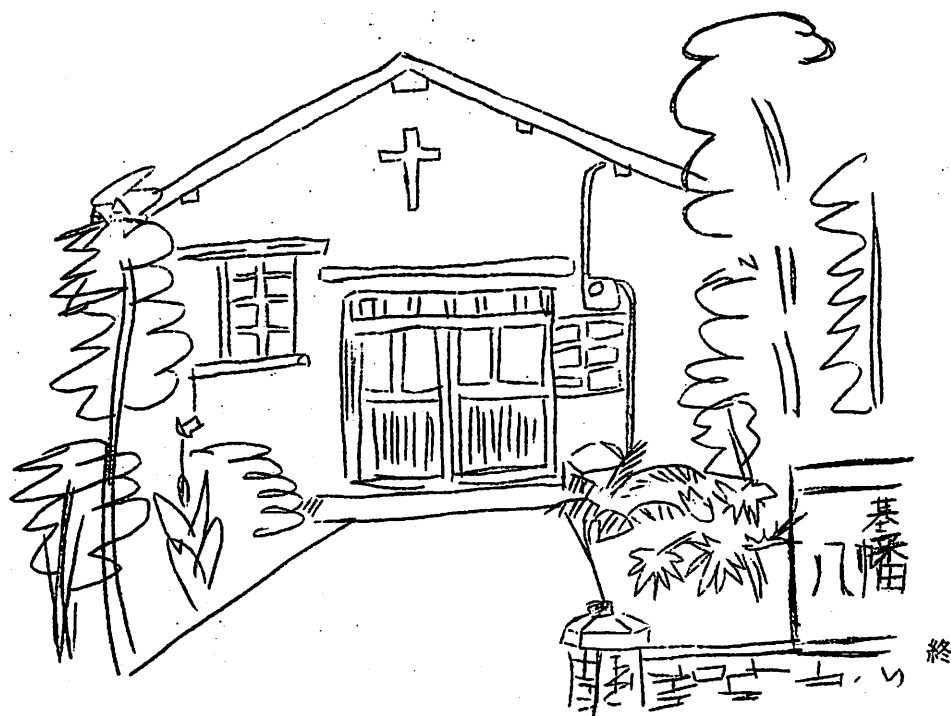
◇窓から見下す 西側空地 は増築前にはもう一間幅

がありました。倉庫の建つ前は畑だつたそうて教会の坊ちゃん達がレンガを立て、雀を捕えたり空気銃を持つた青年が右往左往したり、これも説教に出て来る

「神様の許しがなければ五羽二銭で売られる雀すら一羽も地に落ちない」の例話で有名な所です。かつてこの空間は〇風呂桶屋の電気鋸が叫声をあげていた所で、向うの窓を閉めさせたりこちらの窓を閉めたり、日曜日に止めてくれと申し入れたりしたものです。私もあの時は音響設計便覧か何かを調べて、どんな材料でどんな屏を作れば音が防げるかなどと真剣に考えたものでした。永く祈りの課題でしたが、神様は〇家の転居という方法によつて全く解決して下さいました。北側隅に小さい柿の木が二、三本あります、ある時みのむしが大発生し一本は枯れたようになってしまいました。みのむし退治をしてみるとチリトリに盛つて約二千、三千匹、ゴミと一緒に焼いた事があります。

以上、思い付くまゝに書いて見ました、本誌が発行される頃は新会堂も完成して古いものの記憶は日に日に薄れて行つている事でしよう。しかし多くの聖徒が恵に感じて神様にお仕えした美しい足跡は永く語り伝

えられる事でしょう。



終

続 雑想（花意竹情）

小羊 生

「ほむべきかな、わたしたちの主イエスキリストの父なる神、憐れみ深き父、慰めに満ちたる神。神はいかなる患難にいる時でもわたし達を慰めて下さり、又、わたし達自身も、神に慰めて頂くその慰めをもつて、あらゆる患難の中にある人々を慰める事ができる様にして下さる。それはキリストの苦難がわたし達に満ち溢れているように私達の受ける慰めも又キリストによつて満溢れているからである。」

（Ⅱ コリント一章三一五）

夜という時は私共の暗い淋しい時ですが、然し、人生の旅路に於いて暗黒な夜即ち困難や行詰り苦しみの中を通る時は、豊かな神の恵みの注がれる最も辛いな時だと思えます。

思わない出来事や問題で、必死に戦っている時、病の床に倒れている時、人に捨てられ孤独になつた時、欠乏の中であえいでいる時、それは最もよい恵まれるチャンスと思えます。

草花を育てる時知つたのですが、それは当然の事です。杖にと思つて立て、やつた竹に茎を結びつけていたら、一晩して翌朝見た時、「ホッ」と声をあげる程でした。それは昨日の竹に結びつけた紐を目印にはかつてみたらグンと花の茎が伸びて、生々と緑の葉を美しく輝かせているではありませんか。昼間気がつかない成長の伸びが、夜には一段とはげしい事が分りました。草木の成長に大切な時は暗い淋しい静かな夜でありました。私共の苦難の夜こそ真剣に心を注ぎ出して主に祈り求め、そこから豊かな慰めと祝福の露が注がれて魂は生々と成長して参ります。主はそこから大いなるキリストの力を味い知らせて下さる事を知りました。丘の上に咲く小さく名も知れぬ花が、炎天続きで全くしおれて弱つている時、夜の間の露でたつぷりと濡れて、(朝早く分け入つた私の足をぬらす程)奇麗に生き返つていました。

弱り果て戦いに傷つき枯れる様な時の私共にも、夜の間の露の恵程大きな生きる力はない事を知らされませぬ。恵の露は夜のものであります。

x
x
x
x

「日は花婿がその祝の部屋から出てくるように、又勇士が競い走るように、その道を喜び走る。それは天のはてからのぼつて、天のはてにまで、めぐつて行く。その暖まりをこうむらないものはない。」

詩一九篇五―六

太陽の当る場所は植物にも動物にも欠くべからざる生命の状件であります。日蔭にある草木はひよろ／＼として元気がありません。

私の小さな庭でもそれが現実にはつきりと分ります。日のおく当る所の枝は、生々として葉も青々と良く伸びて太つています。

主の恵の暖まりを豊かに受けた信者も生々としてその葉もしばやまずに、そのなす所が皆榮えて行く事でしょう。万物はこの恵の日の暖まりを受けないでは育ちません。だから私も日蔭の植木鉢は日当の良い場所に移動してやるようにしています。神はこの様なすばらしい恵みの暖まりを一方的に、万物の上に、全人類の上に注いでいて下さいます。善き者にも悪しき者にも差別なく、充分に与えて下さる事は何と感謝か分りません。私共は感謝して只上を仰ぎ望めばよいではありません。

ませんか。

× × × ×

花意竹情という言葉がありますけど、花や草木の心は無言のうちに語りかけます。

ザツキの花を育て、思ひ事は、沢山の春の花が終つた晩春に、静かに咲く花です。緑の葉の繁つた中に謙虚に咲くのは本当に慰めを与えて呉れます。桜や椿や梅の様に赤く高く燃えては咲きませんが、可愛らしく低く咲き乍ら、葉の繁つた中から顔を覗かせて私共を慰めて呉れます。私共も謙遜に咲き、人に喜ばれようと喜ばれまいと変らずに主を崇め乍ら、晩春におくれて咲いてもよい。この地上の何処かで一寸でも慰めと喜びを与え、行く者になれたらと願います。竹は又清楚で緑は美しいので花は咲きませんが、私共の目に安らぎを与えます。山でも庭園でも竹の一群を見れば疲れが癒される様です。実に真直に伸びて立ち、節があり成長の段階を見せて強い姿勢は快いものです。その枝は次々と伸び風のままに吹きなびき乍ら従順であります。然し柔じい様で決して強風にも折れることはありません。

こうして見ますと、万物は皆、神の前に謙遜で従順と忍耐をもつて神の栄光をあらわしております。

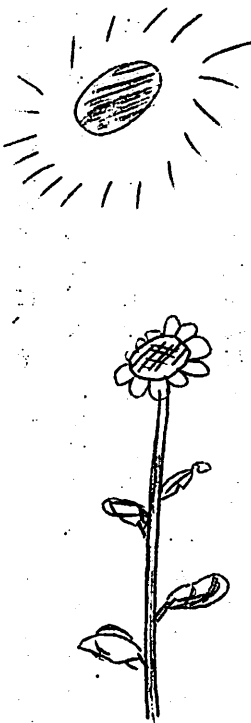
そして私共に色々と語りかけています。

「あなたがたは、代価を払つて買いとられたのだ。それだから、自分の体をもつて、神の栄光をあらわしなさい。」

コリント六章二十

小さい私も、信仰薄き者ですが、何とかして日毎に新しく成長の節があり、高く上へと伸びゆく者であり、霊の風の吹く儘に右にも左にも従いこの花の意竹の情をもつて主に依り頼んで参りたいと心から願いつつています。

以上



老女

一月中旬、教会宛に届いた郵便の封を切ると、この二つのお証しが出てきた。

「安東様だけお読み下さいましてお捨て下さい」と末尾に記されてありましたが、恵みを一人占めにするのほもつたいなく思ひまして事前にお許しを戴かずに掲載させていただきましたこと本誌を借りておわびをいたします。

安東

思ふ出

今、大学入試準備中の次女の娘が産まれる時、私は東京大井町のある産婦人科にお産の手伝に行きました。

二・三日産まれませんでした。先生は人工陣痛の注射をなさいました。二時間後ひつきりなしの痛みで、可愛そりで、いざ出産という時に、産婆さんはイキメとハツパをかけて下さつても、本人はその力すら無いようにした。

先生は私の前の椅子で只何んのお手当もなさらない状態でした。私はどうなる事か、親子共々だめかもしれないと、その時は心配でたまりませんでした。

先生の後の椅子で大声で、もう一生懸命でした。

「なやみの日に我をよべ、我汝を助けん」の聖言を十べんも二十べんも祈りました。おかげさまで産まれました。これが私の人前での初めての祈りでした。

赤ちゃん部屋につれて行きましたが娘は室に帰つてきません。産室に戻りますと、娘はこの世の人とは思えない様を真青で顔色なく、また祈りました。

聖言をさがす様に祈りました。すがりました。その時に与えられた聖言

「汝らが試練を耐え忍ぶことを得んために之と共にのるべき道を備え給わん」イコリ一〇・一三を思い出させて下さいました。

ほんとうに不信仰で斐般のような信じかたでも、せつばつまつた時、イエス様を信じるならば、大いなる力を与えられ、平安な心を与えられるのだと感謝しました。

このことを思い出しては、少しづつ素直に信じる様になりました。

とにかく励まねばいざという時に間に合わず、静まることはできませんと、教会にお近ずきさせて戴きました。

九州に来てから一年間、ぼんやりいたしております内、榎本先生のお導きにより、厚き愛の労をとつて下さいましたこと感謝いたしまして過ぐる日の思い出を記させていただきました。

終

私は雑草

神奈川県に住んでいた頃、庭のバラの花がいつもきれいに咲いていました。

そのそばの雑草はバラのいげ／＼にさわりそうで、なかなか取りにくく、時々可愛らしい花を咲かせますので取りきれないでいました。

神様の御意はこんな心だなあと一人思っていました。雑草の様な私も今では年と共に、骨は古び、身は衰え老後となりました。イエスをお知りにならない人とは話しがしにくい年となりました。嫁入先の娘の家の危

介者になりましたしうとは思わなかつたのに、養われる身となりました。娘達に不幸な親となりました。

どうかしてつまらぬ雑草でも、人に御迷惑をかけるなで生きのびたいと考えていましたが、なか／＼自分では思う様にはなりません、神のおゆるしがなくては何事もできませんので、今日まで「いやな風もあろうに柳かな」の文句のように、その時々風の風になびいていました。

「外なる人は滅びても内なる人は日々新なり」の聖言によりまして、なやみ多い人生旅路を主によりて支えられ、悲しんでいる様な境遇を喜んでゐる心境で、心の底に雑草の根の様に、見えない土中にしつかりした神様を信じる根があれば、たとえ土の上の雑草は取り除かれても、根は絶えなないと、信ずる者は幸なり」と思う雑草でございます。

「金銀は我になし、されど、イエスキリストの名によりて歩め」の聖言を学んでおります。

我行く道、いついかに成るべきかは知らねども、主は御意なし給ふりと信じさせていただいてゐる昨今でございます。

③げにも生くるは ただならじ

うしろのものを うち忘れ

まえなるものを 望みつつ

いざためらわで 奮いたたん

④主とともにゆく わが旅路

雲のはしらに みちびかれ

あめなる糧に つよめられ

ただひとすじに 進みゆかん



終

籠を出た小鳥

上野 米子

きびしかつた寒の戻りも和らぎ、夜来の雨に今朝の暖かさは格別春の趣が濃い。

東が明るむ頃、私は小鳥籠を家の中から軒端に移した。風邪気味で伏つていた主人も、「今日は出かけてみる」と言つて一〇時頃外出の支度にとりかかつた。

「メイ子ちゃん今日は暖かね」私は独り言を言つて庭におりた。ひよいと鳥籠を見たたん、大きな声で「お父さん小鳥が居ないわ、餌をあげる時は居たのよ」「居たよ」「入口を閉めるのを忘れたのね」入口が開いたままになつてゐる。「いや今朝は餌の入口から餌をとりかえたよ、大きい入口は知らないね。」、二人の回答はつづいた。入口はマツチの軸木で止めてある。どうやら昨晚子供が開けたらしい。運動をさせてやると言つて、よく部屋に放つのである。それを知らずに私達二人は見過ごしたらしい。閉ざされているものとはかり開いているのも知らずに信じていたのである。「信じる」と言うことは、このようなものではないか

しら、と私は思つた。

実はこの小鳥、昨年の五月のバード週間に勝手もとのメタセコリヤのふくらんだ新芽の小杖に止まつて居ました。

早速つかまえて大きなザルに伏せ、近所の小鳥を飼つている家をまわつて持主を尋ねましたがありませんでした。

放して悪童どもにつかまつてもかわいそうと思ひ、主よりの賜りものと感謝して、家で飼うことにしました。

毛並の揃つた若い黄色なセキセイインコでした。

それから主人の世話係としての日課が始まりました。毎日籠の掃除、食事の世話大変のようです。新しくされますととてもすばらしい声で鳴きます。

五月に我が家の家族となりましたので、五月にちなんで「メイ子」と名づけました。

十ヶ月の間に翼も嘴も強くなり、時折、嘴で入口を開ける様子をします。姿を消す二週間程前の晩、盛んに嘴で入口を開けようとしみますので主人の帰宅を待つて外へ出しました。

うれしそうに部屋の中を雀のように歩きまわり、食卓の上にも上り、食器から食器へつつきまわり、私の肩や主人の頭のとつべん、眼鏡のふちに止つたり、それは——愛嬌をふりまきました。「今晚この鳥おかしいね、今朝餌をやつたのに」と主人は独りごとを言いました。

今思いますとあの食卓での愛嬌ぶりは、主の最後の晩餐を偲ばしめ十ヶ月間の感謝をあのような姿で現わし、私共を慰めてくれたのではなからうか。不思議なように手に入り、考えてもみない瞬間の裡に最後の姿も見せず失せる。

「神与え、神とり給う」御言が胸中を去来する。

いつか礼拝の御説教に「籠に飼われた小鳥の姿と、この世の絆に縛られた人間生活を対照してのお話しがありましたが、ほんとうに小鳥を毎日見ておりますと、全くそのとおりで籠こそ小鳥にとつては安住の所でした。その籠を小鳥は出しました。そして自然の姿に戻りました。籠こそ不自然です。それでよいのです・・・。と思いつつも、もしかと思ひ入口の開いたままの鳥籠をそのままにしておきました。

空を見上げ、屋根を見上げ、木々の木立を尋ねたり、
槇の黄色い新芽を見間違えたりして、ひたすら帰りを
待ちわびました。心に穴があいたような淋しさにおそ
われました。

この心境、聖書にある放蕩息子の帰りを待ちわびる
主の御姿が拝せられ感無量です。

成鳥として力に満ち、籠を出たのであるからこれが
自然である。私共が考えるより「主は勞せず、紡がず
して花を咲かせ、鳥を養い給う」とあります。

来たらんとする春を謳歌しつつ、神のつくり給える
自然のふところに帰つていつたあの小鳥メイ子。

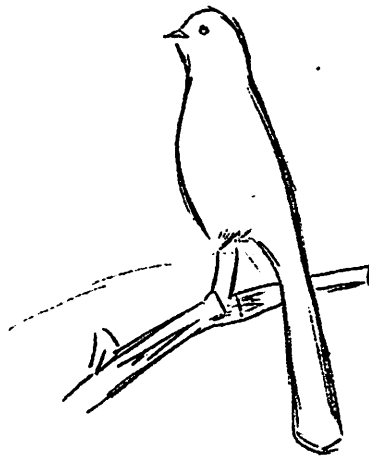
夕暮のせまる頃、今晚は何処に宿るやら「どうぞ、
よきものをお与え下さい」と愛する小鳥の旅路を祈り
ました。

主のいない鳥籠の下には、明朝もこぼれ餌を拾う雀
がいつものようにたわむれることでしよう。

神様はいろいろな事物の現象を通して私共に御聖旨
をお語り下されて居ります。「目を覚ましていなさい」
今日もまた主は語つておられます。

(昭・四九・三)

終



編集後記

今回もすばらしいお証、原稿をたくさんお寄せ下さり、ほんとうにありがとうございます。

基督伝道隊として一本立ちをして早一年、いよいよ生ける主の証人として聞き従い行きたいと思えます。

皆様方のお証しの数々をぜひ十号にお寄せ下さいませよう、また編集の不手際で発行がおくれましたことお詫び申し上げます。

一九七四年四月

安東篤良

